

茅盾の神話研究について

桑 島 由美子

現代中国における神話研究、ひいてはフォークロアの研究は、特に初期の段階に於て、作家、音韻学者、言語学者、歴史学者等、他分野の人々の余業に負うところが大きい。

リアリズム作家として著名な茅盾（沈雁冰1896—1983年）にも『中国神話研究ABC』を初めとする少なからぬ論著があり、中国神話研究の草分けの一人でもあるのだが、その学術的貢献は、ともすれば「小説家の余技」程度の感心しか示されてこなかった。

しかし、茅盾の神話研究は、時期的に見ても中国の神話研究の先鞭をつけた先駆的業績である事は確かであり、その神話理論は、文学の起源論として、茅盾の文学観にも影響を与えている。本稿では、その神話論の特徴を知る上で、最も重要と思われる三つの論著の解題によって、初歩的な考察を試みたい。

商務印書館の編訳所時代（1917—1925年）から『中国寓言初編』『莊子』『淮南子』『楚辞』などの編纂に携わり、又広く外国の神話を紹介してきた茅盾は、1922—23年、上海大学においても、小説研究の一環として、神話学を講じた。1925年頃から『小説月報』『文学週報』などに神話研究に関する論述が連載される。それら一連の論述の集大成とされているのが、『神話研究ABC』（1929年1月出版、『中国神話研究初探』に同じ）である。

この著作の最大の特色は、イギリス人類学派の神話理論を応用している点にある。本国イギリスでは、御伽話の著作によってもっともよく知られ、周作人も傾倒したというアンドリュー・ラング¹⁾や、『原始文化』の著者、タイラー等の分析視角が、広範に中国神話研究に導入されている。

日本においても、ラングは、フォークロアでは、柳田国男に、また近代神話

学では高木敏雄に方法論的示唆を与えた人として記憶される。ラングが“*Myth, Ritual and Religion*”で示したような、進化論を機軸とした通文化的な方法による世界神話の比較分析は、日本や中国における草創期の神話研究に裨益する所が大きかったようである。

矛盾の神話研究に関する論述には、次のようなものがある。

1925年

(1) 「中国神話研究」小説月報16—1

1926年

(2) 「各民族の開闢神話」民鐸雑誌7—1

1927年

(3) 「各民族の神話何以多相似」文学週報5—13

1928年

(4) 「自然界の神話」文学週報一般4—1

(5) 「《楚辞》与中国神話」文学週報6—8

(6) 「中国神話的保存」文学週報6—15/16

(7) 「人類学派神話起源の解釈」文学週報6—19

(8) 「神話的意義与類別」文学週報6—22

(9) 「北欧神話的保存」文学週報7—1

(10) 「希臘神話与北欧神話」小説月報19—8

(11) 「希臘羅馬神話的保存」文学週報7—8/9

(12) 「埃及、印度神話的保存」文学週報7—12

(13) 「關於中国神話」至大 大江月報3

(14) 『神話的研究』商務印書館百科小叢書

1929年

(15) 『中国神話研究ABC』上 ABC叢書

(16) 『神話雜論』例言 上海 世界書局

(17) 『北欧神話ABC』上海 ABC叢書社

1933年

(18) 「談迷信之類」申報月刊2—11

1934年

(19) 「読《中国の水神》」文学3—1

一連の研究を補足説明すると、(1)では、神話とは何かという問いかけから、中国神話の材源の検証などに触れている。英文の書（デンニスとウェルナー）への批判を含む。(3)では、各民族の共通項としての創世の物語と、洪水神話を列挙し、その著しい相似性についての神話学者の諸説を紹介している。結論としてラングの妥当性を認めている。(4)は、ラング『神話、習俗と宗教』の第五章を紹介している。(5)は、『楚辞（選注本）』（商務印書館1928年9月出版）の緒言と重なる。(13)は、鐘敬文『楚辞中的神話和伝説』に対する論評であり、(19)は、黄芝崗『中国的水神』（生活書店、1934年発行）の比較しつつ帰納する方法論を、ラングの原則に近づくものとして高く評価している。

またラングの宗教学に関する著作としては、次のようなものがある。（いずれも出版社は、Longmans, Green, and Co., London）

“Magic and Religion”

“Custom and Myth: Studies of Early Usages and Belief”

“Myth, Ritual, and Religion”

“Modern Mythology: a Reply to Professor Max Müller”

“The Making of Religion”

1. 『近代文学体系的的研究』1921年

鴛鴦胡蝶派、学衡派との論戦において、矛盾は、彼らは主観的で、古人に追隨するばかりであり、「倫理学、心理学（社会心理学）、社会学などを研究したことがない。」⁽²⁾と論難している。

新興諸科学の概念は、人類学的な神話理論をも含めて、ある時には新文学の理論的根拠としての意味をも持っている。

矛盾の神話研究は、1920年代半ばから始まるが、初期の文学論の中では、『近代文学体系的的研究』の中に、イギリス人類学派タイラーの神話理論の影響が見られる。同著は、劉貞晦、沈雁冰共著『中国文学変遷史』（上海新文化書社、1921年）の後半部（新文学）に当たるもので、次のような構成になっている。

第一章 総論

(甲) 近代文学何以重要

(乙) 近代文学界説

(丙) 近代文学的淵源

第二章 近代文学主要的幾類

- (甲) 説部 小説和短編小説
- (乙) 詩
- (丙) 劇本 長劇和独幕劇等
- (丁) 結論

共著者である劉貞晦は、北京大学教授で、当時、茅盾は二十六才、出版時期が1921年と早いこともあり、この文献は今まで、捜し出すことができなかった。幸いにして今年五月、北京の中国現代文学館で資料調査の際、はじめて閲覧することができたのであるが、珍しく総論的体裁の整ったこの論著が、中国でも一般にあまり知られていないのはなぜだろうか。茅盾の初期文芸観を論じたいいくつかの論考や専著にも、引用されていない。

文学と原始宗教の関係、神話と短編小説の関係などに触れた内容は、茅盾の初期文学観に見える概念、(例えば「人類共通の感情」を機軸として展開する文学史など)が、やはり文学以外の分野から借りてきた概念であることを窺わせる。こういった飛躍的と見える解釈も、旧文学打破のために必要であったと思われる。

『近代文学体系的研究』の内容を見ると、初期の他の論著と同じく「芸術」という言葉は、文学形式=技術(手法)という意味で使われている。故に文学は「純粹の芸術」でありえず、文学はその起源から個人の思想を表現するものであったとする。また文学は神話から短編小説に進化したとして、タイラーと同じく、原始人の瞑想や原始心性に文学の起源を求めている。

後に茅盾が『夜読偶記』の中で「神話的リアリズム」と名付けた「リアリズムの淵源」の萌芽を、ここに見ることができる。

同時期の評論、「文学与人生」の中で、茅盾は、文学と人生の関係は、単に社会的であると言うだけでは不十分であるとして、次のように述べている。「文学と人生とは簡単に説明すれば以上のようなものに過ぎない。ここで我々は一つの教訓を得た。つまり、およそ文学を研究しようとするなら、少なくとも人種学の常識を必要とし、少なくともその様な文学作品の生まれた環境を知ること、少なくともその様な文学作品の生まれた時代精神を理解することが必要であり、かつその様な文学作品の中の、主人公の境遇と心情を知らなければならないのである。」⁽³⁾

人種、環境、時代精神という「人生のための文学」の三つの要件は、イッポリート・テーヌ（Hippolyte Taine, 1828—93）のミリウ（環境）説によるところが大きいと思われる。（自然主義自体の基礎が、テーヌの実証主義美学による。）特に環境という概念は、後の創作を大きく規定することとなったが、人種（民族）の認識も、科学的文学（自然主義文学）の根拠であるとして、矛盾がエスノロジーを深く感知していた事は、興味深い。人類、あるいは平民という言葉は、文学現象を抽象化する上で必要なタームであったと思われる。

ところで、「人類の感情」（平民の感情）を盾に取った「近代文学」の重要性とは何であろう。

（1）近代文学は貴族の玩具ではなく、供奉の文学ではなく、社会の工具であり、平民の文学であるから重要なのである。

（2）近代文学は、一握りの貴族の生活の反映ではなく、大多数の平民の生活の反映であるから重要なのである。

（3）近代文学は、一握りの貴族の感情表現、喜怒哀楽の反響ではなく、大多数の平民の人道正義を欲求する呼び声であるから重要なのである。

（4）近代文学は旧守の退化の文学ではなく、前向きに真理を猛求する文学であるから重要なのである。

（5）近代文学は、空想的な虚無の文学ではなく科学的な真実の文学であるから重要なのである。

1921年に書かれた矛盾の数多くの文学論の中でも、このようにあからさまに文学の階級性を標榜した新文学論は他には見られない。『近代文学体系的研究』は、文壇の刷新に華々しく活躍した、初期の矛盾における新文学とイデオロギーとの二重構造を暗示している。

2. 「中国神話研究」1925年

19世紀ヨーロッパのフォークロアは、国家意識の高揚を背景にしていたが、中国でフォークロアへの興味が起った時、つまり五四期の知識人達は、民族の過去と史的遺産に対する偶像打破に没頭していた。北京大学で起きた歌謡収集運動にしても、本来政治的な国家主義的な色彩はなく、むしろ伝統的エリート文化に対するアンチテーゼとしての色彩が強かった。しかし、この初期の局面から数年後には変化が生じる。北伐の進展によって、国民政府による統一の機

運が高まったことも、一つの要因と思われる。

『中国神話研究』の一つの特質は、まさにそういったナショナルな意識を窺わせる点にある。

この論著では、そもそも、矛盾の神話研究の方法論的模索が、自国の神話に対する弁護の中から始まったことがわかる。この中で、矛盾は最も初期に中国に紹介された二つの論著、デンニス (N.B. Dennys) の『中国民俗学』(“The Folklore of China”)とウェルナー (E.T.C. Halmes Welner) の『中国神話と伝説』(Myth and Legends of China) について論評している。

このうち、後者については、その最大の欠点は、材料が錯雑であることとし、理論面においても、中国神話の成立の「外因性」や、停滞史観に反論している。その十年後に書かれた「読『中国的水神』」でも、黄芝崗の比較、帰納的な方法論を、ラングに近づくものとして高く評価するとともに、再びウェルナーに対する批判が見える。そして神話研究の方法論の結論として、一つには、秦漢以前の旧籍から、中国神話の「原型」を捜し出すこと、二つ目は、秦漢以後の書籍、さらに現存する民間文学の中から、中国神話の演変(進化)を考究することとし、民間文学の見直しを強調する。

一方、神話研究に仮託されたナショナリズムは、ラングの原始一神教論(今日では通用しないが)の受け取り方にも端的に現れている。「もしラング氏の各民族開闢神話の方式から見ると、(彼の方式によれば、最も遅れた民族は、天地万物が一匹の虫、兔、あるいは他の動物によって一挙に作られていたとしている。先進民族は、天地万物を創造したのは、神あるいは超人的な巨人であり、又、万物は順を追って作られたという。)中国の開闢神話とギリシャ、北欧の神話は互いに似ており、後になって偉大な文化を持つようになる民族の神話にも恥じないものである。」⁽⁴⁾

また「楚辞与中国神話」では楚辞を中国の『イリヤッド』『オデッセイ』になぞらえ、これは最も早期の文人文学であり、美麗、纏綿、夢幻を特徴とし、民間文学の神話と伝説をその源泉としていた、と述べている。

ところで、「中国神話研究」の冒頭に於て矛盾は、神話の起源について、既に死んでいる解釈については触れないとし、生きている解釈、つまり、アンドリュウ・ラングの「神話は原始人の信仰と生活の反映である。」という言葉を用いている。そして、マッケンジーもまた「神話は信仰の産物であり、信仰は又

経験の産物である。」と述べているとして、唯物論的な解釈に歩み寄りを見せる。さらに神話の歴史化や改修の事例を挙げ（つまり北歐神話のキリスト教化など）、中国の神仙故事の中で原始人の信仰と生活に当たるのは何であるかを弁別することから、神話研究を始めようとしている。

中華民族の原始信仰と生活状況を表現した神話は、次のように類別されるとする。

- 一、天地開闢の神話
- 二、日月風雨およびその他の自然現象の神話
- 三、万物来源の神話
- 四、記述神
- 五、幽冥世界の神話
- 六、人物変形の神話

以上のように、『中国神話研究初探』のアウトラインは、ほぼ「中国神話研究」の中に出尽くしているとみてよい。

中国神話の特殊な事情に関する洞察も見られる。「中国古代の文学家は、『詩経』の中の無名詩人以外は、ほとんどが政論家、哲学者である。政論家が神話を引くときには、神話を古代史として引用するのであり、哲学者が神話を引くときには、神話を寓言として引いて来て自分の意見を明かにするのである。」⁽⁵⁾このように、神話と古代史との関係、神話と寓言との関係、中華民族と「精霊崇拜」、神話と迷信など、比較文化的な視点からの概念分析のいくつかも、そのまま『中国神話研究初探』に持ち越され、次の課題、つまり中国神話の系統化を準備している。

4. 『中国神話研究初探』1929年

茅盾が日本亡命中に、携帯していた僅かな資料を駆使して書いた論著であるが、神話研究の代表的著作であり、邦訳もある。（玄珠著、伊藤弥太郎訳『支那の神話』、地平社、昭和18年9月15日初版）

構成は次のようになっている。

- 第一章 幾つかの根本問題
- 第二章 保存と改修
- 第三章 変化と解釈

第四章 宇宙観

第五章 巨人族と幽冥

第六章 自然界の神話及びその他

第七章 帝俊及び羿・禹

第八章 結論

以前から茅盾は、ラングの学説に全面的に信頼をよせているが、とりわけ各民族の神話の相似性を説明する「心理説」については綿密に検証している。⁽⁶⁾「心理説」によれば、人類は、その進化の原初的段階に於て、その思想や自覚心の発達上、各民族が相通ずる形跡を持ち、その発展（進化）が進むにつれ、異同が生ずるとする。

茅盾のこの論著とほぼ同時期に出版された黄石『神話研究』謝六逸編訳『神話学ABC』なども人類学派の神話理論を紹介しているが、もとより紹介の域を出ない。この論著は、茅盾自身が言うように「一つには革創的な性質であり、二つには序論的な性質である。」ことは否めないが、東西の神話から縦横に事例を引きながら、「心理説」「遺形説」などラングの学説を中国神話に於て検証していることは興味深い。材源としては『山海経』を比較的重視し、中国神話の「原形」の考究を試みている。

茅盾の論述は、一見してわかるように、ギリシャ神話、北欧神話と中国神話との個別的なアナロジーを列挙している。それは例えば、神話の歴史、文字学派、など解釈上の問題から、洪水神話、天地創造、楽園、山岳信仰、巨人、太陽神、その他の自然神、運命神、民族英雄、などに及ぶ。

例えば、ギリシャの弦歌詩人は、神話に新解釈を加えたり、美化することが多く、悲劇作家も合理化を計ったが、中国では「太史公」の執筆と同時に神話の大部分が消滅したのではないかとしている。(歴史化の徹底)また西洋の「文字学派」が指摘した「言語の疾病」は、中国の古籍中の神話材料が「字の訛り」と見なされてきた事に対応する。

個別の分析に際しては、華南、華中、華北の地域性に着目し、その北方的要素、南方的要素をそれぞれ世界各民族の神話と照合したり、多様な要素の混合構造から、中国史における地域的交流にまで言及している。最終的には中国神話を、多様な社会意識形態の総合体という側面から捉えており、その流動的側面（歴史化、伝播など）に留意しつつ、普遍的側面を把握しようとしている。

ちょうどクロスワードパズルの空白を埋めるように、ほとんど系統を持たない中国神話の原型を修復する試みがなされている。たとえば、北欧神話の豊かさを引合いに、『三百篇』以後の北方神話衰退の理由を分析しつつ、中国における北方神話の存在証明を試みて、「中国の開闢神話が、南方の帽子を戴し、北部の衣装をまとっているということも断言できる。」⁽⁷⁾としている。

北方神話衰退の理由の一つは、歴史化によって神話的色彩が失せたことに加え、北方民族が、「史詩的」でなく「散文的」な生活を送っていたため、「神代詩人」が出現せず、そのまま春秋戦国の「写実的な」社会生活に入って行ったためとされている。

最終的には、中国における民間の哲学、原始宇宙観、自然界に対する認識、神話の美麗などを、断片的にでも蘇生させることが、この論著の主な関心事のようである。

結論

矛盾の神話研究と、小説の執筆は、ほぼ同時期に始まっているが、幻想と現実が交錯し、恋愛問題一般に政治的シンボリズムを絡み合わせた初期小説の寓話的性格には、神話的要素が垣間見えるようだ。『近代文学体系的的研究』の中で、文学の進化は、神話から短編小説へと進むと述べているが、彼自身、初期の創作においては、寓話的な色彩の濃い短編小説を数多く書いている。

また、その擬人化を特色とする特異な自然描写は、アニミズムを連想させるし、『虹』『蝕』『子夜』『煙雲』など、自然現象を小説のタイトルに採用する辺りにも矛盾の神話趣味の片鱗が窺われる。史詩的あるいは歴史と未分化とも言われる矛盾の小説は、一方で神話的ベクトルを持ち合わせているのかも知れない。しかも、神話におけるリアリズム（神話的リアリズム）という概念は、発展的にリアリズムを見て、広義の（縦の広がり）リアリズムを支持する立場の矛盾にとって、重要な理論的根拠になっている。

矛盾の文学論には、人類学、心理学等の理論を広範に取り込みながら、最終的にはマルキストとしての自己の政治的立場にたちかえるような、巧妙な理論展開が特徴的に見られる。神話研究の場合にも、一貫してイギリス人類学派を論拠としながら、その思想においては、当初から階級的、民族主義的、唯物論的な志向の強いことは、ここで見てきた文献の中に明かである。

初期の文学進化論から、晩年の『夜読偶記』にいたる茅盾の文学史観の理念的難解さは、自然科学的理論を社会科学的に解釈したり、(例えばテーヌの環境論)あるいは社会科学的概念を文学史の系統化の基準としていくこと(例えば、民族、平民、国民等の抽象化された理念)から生じるのではないだろうか。少なくとも、民族学的アプローチによって、文学史の視野を広げただけでなく、初期の進化論を克服して中国神話の構造的理解に進むプロセスは曲折に満ちている。五四の潮流の中で、新しい科学と哲学の、無限の可能性を信じた、当時の知識人における意識の様相の、一端が窺われる。

〔註〕

- (1) 周作人とラングの関係については、「習俗與神話」(『夜読抄』所収、香港実用書局出版、1966年、28頁)を参照。民国22年2月11日付この一文では、日本留学中の1907年以来のラングへの関心、ラングの人と思想について詳しい。ハガード(Haggard's H.R.)とラングの共著“The World Desire”を『紅星佚史』と改題して翻訳した事が、最初の契機であったようだ。
- (2) 茅盾「現在文学家的責任是什麼？」(『東方雜誌』17—1、1920年1月10日)
- (3) 茅盾「文学与人生」、松江『學術演講録』第一期、1923年
- (4) 茅盾「中国神話研究」、(『小説月報』16—1、1925年)
- (5) 同上
- (6) 茅盾は、「各民族的神話何以多相似」(『文学週報』5—13、1927年)の中で、心理説について次のように解説している。「心理説(Psychological Theory)則ち、神話起源の解釈における人類学派の主張であり、この派は各民族神話の相似を原始人の思想、情感の相似、経験の相似に求めるが、彼らの自然環境が同じではないので、かれらの神話に「同じ中にも相違がある。」とする。この説はグリム(Gurimm)が提唱し、まだ完全ではないが、人類学派の諸大家が、これを更に拡大強化して強固な理論を打ち出している。」
- (7) 茅盾『神話研究初探』(『茅盾評論文集』(下)人民文学出版社、1978年、277頁)